

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2009

課題番号：18520430

研究課題名（和文） 英語能力育成を目指した小・中連携による英語教育実践の縦断的調査

研究課題名（英文） A longitudinal observation of the learners' abilities who have experienced English education throughout nine years' periods from elementary to junior high school.

研究代表者

白畑 知彦 (SHIRAHATA TOMOHIKO)

静岡大学・教育学部・教授

研究者番号：50206299

研究分野：英語教育学・心理言語学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：小学校と中学校連携の英語教育、言語教育特区、沼津市、英語能力の向上

1. 研究計画の概要

静岡県沼津市でおこなわれている「言語教育特区」での英語教育実践を長期的に観察し、児童・生徒達の英語能力や態度面がどのように変化していくのか、または変化しないのか、調査分析し、今後の日本の英語教育への示唆を与えることである。

2. 研究の進捗状況

本研究の目的は、沼津市の小学校・中学校(小・中)連携の下におこなわれる英語教育実践を縦断的に観察し、生徒に身につく英語能力がどの程度のものになるのか調査することである。「連携のとれた小・中一貫教育をおこなえば、中学生の英語能力は現状よりも全体的に向上するはずである」という仮説を立て、その検証をおこなっている。

小学校と中学校の連携さえスムーズに行けば、中学3年生の卒業時点で、現状の中学3年生の英語能力よりも必ず向上すると確信している。それは、これまでに、小学校での英語教育/英語活動に数多く参観し、実際に言語習得データを収集してきた上で感じていることである。

沼津市では、小学校1年生から中学3年生までが、他の公立校よりも大目に英語の時間を確保している。その時間におこなわれるコミュニケーション能力に重きを置いた英語授業実践が、中学3年生の卒業時にどのような形となって開花するのかを調査するのが目的である。

授業観察は毎月行き、英語に対する態度面の変化を日記風に記録している。また、具体的テストは、毎年3月におこなっている。そ

の内容は、聞く、話す力、書く力（文法能力を含む）、読む力、そして、語彙力を測定している。収集されるデータを分析した一部は、白畑（2009）などで公表した。概略を述べれば、3年目の今年あたりから、英語能力が統計的見地から見ても向上していることが判明してきている。また、英語や外国に対する態度面の変化も著しく、外国人に対する引っ込み思案の生徒の数も減少してきている。今年度中に数本の論文が作成できる見込みである。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

理由は、毎年必ず期待していたとおり、言語習得データが収集されており、その分析も、時間はかかるものの、着実に進行しているからである。

4. 今後の研究の推進方策

本年度は、これまで収集したデータの総まとめを夏休み明けまでにおこない、秋以降は論文の形（報告書の形）にして行くことである。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- (1) 白畑知彦「小学生の英語能力調査」
『中部地区英語教育学会紀要』 査読有り
2009年3月 pp.173-180.
- (2) 白畑知彦「文法理論の外国語教育へ応用
を考える」 『言語』 査読無し 11月
号 2008年 pp.60-65.
- (3) 富田祐一・椎名紀久子・白畑知彦・高橋
美由紀「特区における英語教育の実態調
査の結果の分析」 『日本児童英語教育学
会研究紀要』 査読有り 第27号 2008
年 pp.1-24.

〔学会発表〕(計3件)

- (1) 白畑知彦 「小学生の英語能力調査」
『中部地区英語教育学会』 2008年6月
29日 清泉女学院大学

〔図書〕(計2件)

- (1) 白畑知彦 松柏社 「言語習得」 『ス
ペシャリストによる英語教育の理論と応
用』 2008年 pp.63-78. 総頁222頁
- (2) 白畑知彦 高陵社書店「小中連携を巡る
課題 言語習得から見た小中連携」 『小
学校と中学校を結ぶ -英語教育におけ
る小中連携』 平成2007年 pp.64-76 総
頁287頁